

## 記者のつぶやき

株式会社幸書房  
田中直樹

わが国におけるコロナ禍以前と現在の植物油の状況を見比べてみることに今更感はあるかもしれません。それぞれの油種についてであるとか断片的な記事は書いてきたものの、ある程度まとまった全体感の見えるものを提供してこなかった怠惰に懺悔と反省の意を込めて、折角の機会を頂いた本稿のスペースでざっくりと振り返っていきたいと思います。

ここでは、食用に供される主な油種を中心に取り上げることにしてみます。この間、2022年をピークとする油脂・油糧原料価格の高騰による影響も大きく、ユーザー視点では使用する油脂の見直しや節減、消費量はどちらかといえば減少する方向に働いたことに触れておかなければいけません。2023年のコロナの5類移行後、人流回復やコロナ禍以前に増してのインバウンド需要の増加もあり、回復が図られてきているというのが昨年までの状況でした。

表-1にある通りコロナ以前の2019年と2024年を比べてみると、トップ2のナタネ油、パーム油はともに10万トン以上も減少しています。ナタネ油については原料が低油分であったこと、それにともなって生産量が増えたナタネミールの販売に苦労したこともあって、昨年のナタネ油生産量は前年と比べて5%程度減少していることは加味する必要があるかもしれません。コロナ前の2019年よりも10万トン以上少なくなったことには衝撃を受けます。パーム油については、オレオケミカル製品の供給構造が変化したことによって、特にパームステアリンの輸入が大きく減少し、パーム油全体の供給減につながりました。大豆油も減少した油種ではありますが、4%弱の減少にとどまっており、トップ2と比べれば踏ん張った方と言えるでしょうか。大豆白絞油は業務用食用油の代表的な汎用油として欠かせず、また、大豆ミールの供給においても国産は半分強を占め、大切な製品と捉えられていることを象徴しているかのようです。

こうした中でコメ油の健闘は光ります。パーム核油とヤシ油は特徴的な脂肪酸組成ゆえに供給量を落とすことなく維持したのを除けば、ここに挙げる中で唯一コロナ禍以前から明確に増加した油種と言えます。コメ油は認知向上とともに家庭用を中心に需要を拡大させてきており、右肩上がりで成長をつづけています。2019年度（4～3月ベース）に1万2,000トンほどに過ぎなかった家庭用コメ油需要は、24年度には3万トンを上回るまでになっていると推定されます。2019～24年の間に増えた約2万トンのコメ油の供給量の多くは家庭用需要の増加への対応だったことがうかがえます。

コーン油については、飲料向けの異性化糖需要に原料となるコーンジャームの発生量が左右される面はあります。過去3年はおおむね7万5,000トン前後の供給量で、コロナ禍以前に比べると8%ほど減少した格好となっています。ゴマ油は価格が上昇した中でも堅調だった油種とみて良いでしょう。輸入製品の減少はありました。国内生産はしっかりとした推移を示しました。一方で、オリーブ油は、主産地スペインの2年連続の不作によって油脂全般の価格高騰とは異なる次元のコスト増に見舞われ、2023、24年の輸入量は特に大きく落ち込みました。エクストラバージンのモノがない、あるいは価格が非常に高い中で、やむなくではありながらも工夫してピュアオリーブ油を使用したり、ナタネ油やヒマワリ油などのブレンド油、はたまた他の油種へと移行する動きもみられました。オリーブ油価格はピーク時から軟化してきていますが、すぐに元の鞘に収まるには今もって至っていません。

ヒマワリ油、アマニ油、綿実油、サフラワー油もそれぞれ 2019 年に比べて 24 年の供給量は減少しています。ヒマワリ油に関してはギャップが大きく、輸入通関統計の非公表化処理されているのかもしれません。アマニ油は工業用が半分程度を占めていると推測しますが、搾油や原料油輸入のタイミングによって増減がブレることもありますので、参考程度の減少といったところでしょうか。綿実油に関しては、搾油もいくらか減少しましたが、輸入油がほとんど見られなくなったことが減少要因になっています。サフラワー油については、ギフト用途が減少していると思われます。

表－1 2019年と2024年の主な植物油の供給量

(単位:トン)

	生産量		輸入量		供給量計		増減
	2019	2024	2019	2024	2019	2024	
ナタネ油	1,013,991	911,176	37,799	8,900	1,051,790	920,076	△131,714
パーム油	-	-	778,648	654,851	778,648	654,851	△123,797
大豆油	488,923	478,940	10,842	1,939	499,765	480,879	△18,886
コメ油	66,531	78,585	33,138	41,948	99,669	120,533	20,864
パーム核油	-	-	73,891	76,092	73,891	76,092	2,201
コーン油	80,731	73,767	0	336	80,731	74,103	△6,628
ゴマ油	53,257	55,802	2,679	826	58,936	56,628	△2,308
オリーブ油	-	-	70,908	44,401	70,908	44,401	△26,507
ヤシ油	-	-	39,010	39,755	39,010	39,755	745
ヒマワリ油	-	-	27,651	12,838	27,651	12,838	△14,813
アマニ油	1,584	1,038	9,124	8,407	10,708	9,445	△1,263
綿実油	4,577	4,106	2,944	147	7,521	4,253	△3,268
サフラワー油	-	-	7,109	2,419	7,109	2,419	△4,690

資料：農水省「油糧生産実績」、財務省「日本貿易統計」より作成。

合計△310,064

※簡略化するため、期首・期末在庫は供給量計に考慮していません。

2019 年からこれらの油種の供給量が合わせて 30 万トン以上も減少したというのは、非常にショッキングと言わざるを得ません。脂質は 1g 当たり約 9 kcal ですから、2 兆 7,000 億 kcal の供給が失われたことになります。性別・年齢層・身体活動レベルごとに必要なエネルギーは異なりますが、例えば 30~49 歳の普通レベルの男性であれば 2,750kcal、女性であれば 2,050kcal 程度が必要です。成人の 1 日の脂質摂取量は総エネルギー（カロリー）の 20~30% とすることが目標とされていますから、ざっくりと同男性は 60~90g 程度、女性は 40~60g 程度の脂質摂取が必要になります。計算しやすいように同男性の下限、女性の上限の 60g で考えてみれば、1,300 万人分以上の年間脂質摂取目標を満たせる量の油脂供給がなくなったことになります。

ややこしい割にいい加減な計算をして申し訳ありませんでしたが、単純に考えてみれば、これら以外の植物油や動物油を含めておおよそ年間 300 万トン程度の油脂が供給されてきた中で、1 割減少したのですから、人口の 1/10 程度あるいは 1 人が 1 割節油したとった状態になっていることになります。ちなみに、もうひとつ余計な計算をしますと、体重 60kg の人が普通の速度で 1 時間歩くのに約 190kcal を消費すると言われ

ていますから、140億時間分以上歩いて消費するカロリーに相当する活力が5年で消失したわけですが、当然、歩かなくて良くなったわけではありませんのでご注意ください。途方もない数字なので桁が間違つておりはしないか心配ですが、蛇足のネタに過ぎませんので気にしないで頂きたいと思います。

表－2 JAS植物油格付実績

	7,999g 以下のもの (家庭用)	8,000～16,500g までのもの (業務用)	16,501g 以上のもの (加工用)	合計
2000年	416,340	501,240	494,866	1,412,446
2005年	316,395	432,162	528,624	1,277,181
2010年	304,599	396,179	556,603	1,257,381
2015年	288,260	399,444	613,360	1,301,064
2019年	283,056	411,523	626,464	1,321,043
2020年	298,705	341,935	608,112	1,248,752
2021年	287,625	356,968	616,449	1,261,042
2022年	237,663	349,982	605,523	1,193,168
2023年	228,618	339,897	605,405	1,173,920
2024年	232,638	361,676	614,133	1,208,447

(資料：日本油脂検査協会)

主要な植物油の供給量はコロナ禍以前に比べて1割減少しましたが、JASの植物油格付数量についてはそこまで大きく減少していません。表－2はJAS規格の植物油の格付実績（生産量）であって、非JAS品は含まれていなかったり、オリーブ油のようにJAS規格が事実上ほぼ運用されてこなかった製品もあることに留意する必要があります。2019年からさらに20年ほど遡った2000年と比べると随分と構図が変わったことが見て取れます。

家庭用と業務用に関しては中長期的に減少してきており、2020年以降はコロナ禍だけでなく特に22、23年にかけて価格高騰による影響も大きかったことがうかがえます。しかし24年はそこからいくらか回復したといった状況にありました。加工用については、さまざまな加工食品市場の成長とともに中長期的に拡大してきており、また、業務用の一斗缶をはじめとしたパッケージ品からミニローリー（ミニタンク）への切り替えなども部分的な伸長要因としてありました。さすがに2020年以降も伸び続けることは叶いませんでしたが、相対的な底堅さはしっかりと示した格好になっています。

個々のさまざまなニーズを積み上げた全体感として、コロナ禍のような特殊な生活環境ではなくなり、海外からの渡航者も過去最高を更新し、油脂価格は高止まりしながらもピークは超えた状況にあって、2019年とははっきりと異なる環境にあるのだなという認識は持っておかなければいけないでしょう。したがって、これまでの需要を取り戻す、回復させるという考え方だけでなく、新しい魅力を以て新規に振り向いてもらえるような取り組みがより重要になってきます。油を大切に使う習慣が定着しているのであれば、油を大切に供給・販売し、以前よりも少ない量でも高い価値を評価してもらえる提案が産業全体の成長に欠かせないことをこうした数字が示してくれていると考えています。